

## 立命館大学ワンダーフォーゲル同好会 手造りの山小屋に末川 博総長から 「青山迎人新」の揮毫を頂いた

1962年昭和37年12月9日立命館大学ワンダーフォーゲル同好会の山小屋が完成した。ドイツ語で渡り鳥と訳され、野山を仲間と一緒に悠遊する。しかし、当時広小路と理工学部が衣笠学舎に別れており、1~4回生合計175名の会員が居たが、同好会ゆえ部室が無かった。更に、平原が主体のドイツと違って我が国の場合は山がすぐ近くに有る。この特性から、第二山岳部的な活動になりがちであった。

私が1回生、2回生の時に10人余の同期生と合宿終わりの団体食料品残をもらって、合宿地の山小屋にもう一泊して、食っちゃ寝の駄弁リングを楽しんだ。その中で、こんな山小屋が自分達のものだったら自由に使えて良いのにと願望を話し合ったことが有る。

別途、上級生グループも北山の山小屋等を利用して、自分達の小屋が欲しいとの声も上がった。そこで会員には@500円/人の山小屋建設資金を出してもらい、学校や、スポーツ店等から一切の寄付も受けとらず、自分達だけの手作りの山小屋を建てることにした。

建設着工は1962年3月25日、芹生や花背にトラックでブロック、砂、バラス、セメント、材木、鉄筋等を運びこんで仮置きし、雲取山の南面、二

の谷の中腹建設現場まで、山道を1時間ボッカして担ぎあげた。正に人海戦術である。現場では土石を削り、コンクリートを流し込み、ブロックを積んで鉄筋ブロック建ての山小屋を造った。不足する資金は、冬の合宿では信州白馬山麓池ノ田ゲレンデの民宿でスキー合宿をしていたが、同好会を宣伝するために一般の学生を140人募集・引率してPRスキーを開催した。20人ほどの会員が中央市場でミカンや菓子類を購入、スキー板を持たない学生が半数ほど居るので、先発隊が現地の村々を馬籠で回って借り集めて汗をかいた。今様旅行会社の添乗員業務をこなして、その後も3回続けて40万円程の収益を上げた。



完成の見通しも立ち、ストーブ、ランプ等の内装品を整備する段階で、末川 博総長の揮毫が頂けないだろうかとの話が持ち上がった。先輩方の中には、総長は多忙で、老齢であることから、私達の要望は慎まなければならないとの声も上がったが、当時の総長秘書渡辺さんが鞍馬の北、花背や芹生方面にハイキングに行かれたことが有り、一度総長に話してみると言うことになって、私と秦さんがこれまでの建設経緯や写真帳を持ち、先輩から寄

贈を受けた松の一枚板を抱えて総長室に入ったとたん、「イオー、やったそうだね」と声をかけてもらい、20分ほど話を聞いて頂いた。土地問題では森林法の保安林内の工事であり、乾昭三先生の助言を受けて保安林内山小屋建設許可も取得したことをお話した。

しかし、筆や墨もなく、私達が自宅に松の板をお持ちすると言ったが、総長は小型タクシーに乗せて持ち帰って「青山迎人新」の揮毫を頂き、



これを12月8日の夜、鞍馬駅から徒歩で花背、寺山峠、二の谷と最後のボッカ、そして完成式前夜に山小屋に掲げることができた。

